

— チェルノブイリに思いをよせて —

ポレーシエ

ウクライナを紹介します



第37代なごや民間大使に就任した
ベレジヌイ・ビタリーさん

私は名古屋国際センターの「なごや民間大使」、ベレジヌイ・ビタリーです。「なごや民間大使」は名古屋国際センターで、外国人が1年間イベントや講座の企画を通じて、日本と異なる文化・習慣の母国を紹介し、市民レベルの国際交流を推進します。来年の9月までウクライナ出身の私がウクライナの習慣・文化などをご紹介し、皆様と交流を図っていきたくと思っています。どうぞよろしくお願ひします。

私は1982年、ウクライナの首都キエフに生まれました。高校の時に日本語を第2外国語として選び、勉強ははじめました。きっかけは世界一の最先端技術、そしてその技術を持つようになった不思議な国民と、中国と同じく一つ一つ意味のある不思議な文字を持つ国という「不思議な」イメージでした。先生にも恵まれて、日本語学習にのめり込むようになりました。そして、ぜひ日本に行ってみたくも思ったので、国立キエフ言語大学の日本語学科に入学して5年間日本語を専攻しました。途中で一年間、国費留学生として東京学芸大学に行きました。帰国後、大学で日本語を教えたり、少しの期間、在ウクライナ日本大使館で働いたりして、今年4月、「愛・地球博」のウクライナ館にスタッフとして来日しました。9月の閉幕まで、パビリオン案内や通訳として務めました。

ウクライナ紹介の最初のイベントは、「民間大使を囲むつどい」で、12月18日(日)14時~16時、名古屋国際センターで行われます。ウクライナを分かりやすくご紹介し、その後で、ウクライナのご家庭で作られるお菓子とお茶を皆様にご賞味してもらいます。また、名古屋の合唱団「ミール」のウクライナ民謡、ウクライナ人と日本人ダンサーにウクライナのダンスを披露してもらい、その後で、皆で楽しくウクライナの踊りを踊りましょう。皆様のご参加を楽しみにしております。

(「民間大使を囲むつどい」については、12月11日(日)9時より052-581-3755にお電話でお問い合わせ・ご予約ください。お菓子代などの参加費は800円です)

〒466-0822 名古屋市昭和区楽園町137 1-10

チェルノブイリ救援・中部 代表：市原佳代

郵便振替：00880-7-108610

TEL/FAX：052-836-1073 (月・水・金 10:00~17:00)

E-mail：chqchubu@muc.biglobe.ne.jp

ホームページ：http://www.chernobyl-chubu-jp.org

「幡豆町とウクライナ」

幡豆町教育委員会 生涯学習課 山崎 豊

今年9月25日、長いようで短かった愛知万博が幕を閉じました。

振り返れば、昨年7月20日に幡豆町とウクライナとの直接の交流が始まりました。愛知万博フレンドシップ関連事業の一環として、世界的にも知られているウクライナのハリコフ子どもバレエ団の約40名の方が幡豆町を訪れ、午前中は幡豆中学校の生徒と、午後からは一般町民との交流会が開催されました。参加者はウクライナのゴパックやよさこいソーラン、幡豆音頭などを一緒に踊ったりして、楽しいひとときを過ごしました。

また、昨年11月24日に行われた中学生模擬議会の中から、ウクライナのチェルノブイリへ義援金を送ってはどうかという提案が出され、そこから募金活動が展開されました。集まった合計461,426円の義援金はウクライナのナショナルデーで手渡されることになりました。



〈ウクライナフェスティバル〉

今年に入るとまず、7月30日と8月2日に公民館講座として、ウクライナ教室を開講しました。蒲郡市在住のウクライナ人女性を講師に迎え、ウクライナの知識や日常会話を学び、またウクライナ料理もいただきました。

また8月5日には、生涯学習推進事業ふれあいカレッジ～ウクライナを知ろう～として、講師にNPO法人チェルノブイリ救援・中部より河田さんを迎え、「チェルノブイリの20年と私たちの救援」と題し、講演会を開催しました。

さらに、夏も終盤にさしかかった8月21日、幡豆町のふれあいセンターを会場に、「ウクライナフェスティバル&はず・おまつり広場」が開催されました。ウクライナフェスティバルでは、キエフソロイスツの優雅な演奏、クニャジドヴィルの愉快的な演奏、ポクッチャによる華麗な舞踊、ソカルスキー姉妹による息の合った演奏が披露され、民芸品やウクライナ料理の販売などもおこなわれました。また、はず・おまつり広場では、地元の太鼓の競演や盆踊り、手筒花火などが披露され、国境を越えた大交流がおこなわれました。

その後、8月24日のウクライナのナショナルデーでは、町長からコステンコ文化観光省次にも花束が贈呈されたあと、前述の義援金が贈呈されました。

万博が終わったあとの9月28日、愛知万博のウクライナ館で音楽演奏をしていた民族音楽バンド、コザチェンキの4人が幡豆町内の小中学校を訪れ、民族音楽を演奏しました。

また、10月29日・30日の幡豆町ふるさと祭りの文化祭においては、特別企画として「子ども達が見たチェルノブイリ展」(注：チェル救貸出)と題し、絵画展を行いました。

以上のように、この1年数か月の間に、ウクライナと様々な交流がされてきましたが、今後、このような交流が少しでも継続され、また町民レベルでも行われるようになってくるようになれば、まさに大成功であったといえるのではないのでしょうか。生涯学習に携わる者としては、そのきっかけ作りの一翼を担っていきたいと思います。



〈民族音楽バンド「コザチェンキ」〉

12月ウクライナ講座のお知らせ

12月にはスタディ・ツアーを前に、今号ポレシェ表紙に登場の「なごや民間大使」ピタリーさんをゲストに迎えます。写真とともに、キエフの見所をレクチャーしていただきます。

また、10月の訪問団として、現地の今を見聞きしてきた原富男さんに、ナロジチなどの画像を交え、問題点や明るい見通しなどを話してもらいます。

クリスマスも近く、温かい飲み物とお菓子で歓談したいと思っています。ぜひ皆さん、ご参加ください。ご家庭で作成されたクリスマスカードがありましたら、当日お預かりします。

日時:12月10日(土) 13:30~16:00

場所:あいちNPO交流フラザ 会議室A

(地下鉄名城線「市役所」下車徒歩2分)

参加費:200円

内容:ピタリーさんのお話と、原さんの
ウクライナ訪問報告 茶話会など

ワールド・コラボ・フェスタ in 名古屋

10月16日に、愛知県国際交流協会と名古屋国際センター共催のワールド・コラボ・フェスタが名古屋市栄の“もちの木広場”で行われ、チェル救もブース参加しました。

愛知万博の波及効果か、一般市民の意識もグローバルに広がり、各NGOのブースを覗いたり、民芸品を買い求めたりと、会場全体に盛況でした。

チェル救も、この機会にとばかり、前日の15日ウクライナ講座は、このイベントの準備とし、バザー用ウクライナグッズに値段付けをしたり、スタディ・ツアーの案内チラシなどを用意しました。一般の人々に「チェルノブイリは、20年を迎えても決して終わらない」「ぜひ、スタ・ツアーに参加し、自分の目でウクライナを見て」「キエフの世界遺産は素晴らしい」などと訴え、語りかける絶好のチャンスでした。おかげ様で、グッズの売上げは25,950円となりました。ご協力ありがとうございました。(戸村)

2006年4月「チェルノブイリ原発事故20年 メモリアル・スタディ・ツアー」 参加者 募集中!!

日程:2006年4月23日(日)~5月3日(祭)

移動手段:ルフトハンザ航空利用の場合:中部国際空港(セントレア)から出発、フランクフルト乗継ぎ、キエフ・ボリスポリ空港・ウクライナへ入国、バスでジトーミル市へ移動。

費用:およそ28万円の予定(内訳:航空運賃22万円と現地滞在費6万円)

参加申込:チェルノブイリ救援・中部 事務局

連絡先:電話/Fax 052-836-1073(月・水・金 10:00~17:00)

スケジュール:チェルノブイリ博物館見学・世界遺産・キエフ聖ソフィア寺院見学など
チェルノブイリ20周年式典参加・支援先訪問

「日本ーウクライナ市民交流デー」企画(1グリヴナ・バザール、写真展など)

チェルノブイリ被災者にとって、事故は20年経っても終わりではありません。厳しい状況の中にあっても暖かいウクライナの人々と交流し、美しいウクライナを訪ねてみませんか?

(連載 その6)

人生は続く……

「チェルノブイリの人質たち」代表

ヴラディーミル・キリチャンスキー



〈似合うね、原さんの帽子〉

1日が過ぎるごとに、私たちはウクライナばかりでなく、人類の歴史にとって悲しむべき日付——チェルノブイリ原発事故 20周年の日近づいていきます。そして過去を振り返る気持ちすら起こらなくなるのです。それはまだ癒えぬ傷口に塩を擦り込むようなものだからです。ですから、ここで20年前のあの日々を思い起こすことはやめておきましょう。私が今日『ポレーシェ』の読者の皆さんにお話ししたいのは、他のことについてです。

もし、「チェルノブイリ救援・中部」とその他いくつかの組織の絶え間ない支援がなかったら、わがジトーミル州の多くの人たちがどうなっていたか、想像することもできません。あえて想像してみるとすれば、単に彼らはもうこの世を去っていただろうということになります。チェルノブイリ事故が起こる以前、ジトーミル州には150万人以上の人々が住んでいました。今では、それよりも20万人少なくなっています。もちろん、外国に移住した人もありますし、ウクライナ国内で転居した人もあります。しかしこの数は主に、亡くなっていった人たちの数です。統計によれば、2004年の州内の出生率は、人口1,000人あたり9人でしたが、死亡率は1,000人あたり19人だったのです！

この数字をごらんになれば、皆さんも気がふさぐことでしょう。ですから、その他のショッキングな数字をここで挙げることはしません。ただ、州の住民の70%、また児童の62%は、何らかの病を抱えているとだけ言っておきましょう。皆さんがご存知のナロジチ地区では、完全に健康とみなされる人は一人もいないのです。しかし子ども達は、私たちの未来です。もし今日彼らのことを気かけなければ、私たちがどんな将来が待っているかは想像に難しくありません。

ウクライナの政府は、絶えずあくせくと何かをしでかしています。閣僚たちは次々と入れ替わり、人類に普遍的な価値を口にしてはいますが、実際には、権力が自分のことにかまけているだけです。毎年チェルノブイリの記念日には、「この日だけでなく、日々すべての被災者に配慮しなければならぬ」といった美辞麗句を並べるのがすでに通例になってしまいました。しかし、4月26日が過ぎてしまえば、こういった台詞はすべて忘れ去られてしまいます。支援を求めても、「もう予算が残っていない」という文句が繰り返されるだけです。その一方で、議員たちの給料や年金は増額されます。いったい、最低年金額の332グリヴナと、最高議会議員の年金額15,000グリヴナを、どう秤にかければよいのでしょうか？〔訳注：1ドル=5グリヴナ前後。9月1日から、最高議会議員の月給額は5,000グリヴナから17,000グリヴナに増額された。それに伴って、年金額も4,100グリヴナ以下から14,000グリヴナ以上に増額しようという法案が採択されたのに対し、ユシェンコ大統領は拒否権を発動。この間、議員俸給の大幅値上げは世論の反発を巻き起こしており、この件がどうなるかは未確定。〕これが庶民と権力者の違いなのです。もし日本人ででもなければ、生活に不自由のない人間に、どうして貧しい病人のことが理解できるでしょう？ 理解できるはずはありません。

レーニンという人物をご存知でしょうか？ 彼は、19世紀に人々の暮らしを変え、ロシア皇帝の権力をくつがえそうとしたデカプリストたち〔訳注：1825年12月、失敗に終わった反乱を起こした自由主義的貴族たち〕の果たした役割について、「彼らはあまりにも民衆から離れていた」と言ってい

ます。我が国の指導者たちも、民衆からは非常に遠いところにいます。ですから私たちは、自分自身と、友人たちの支援に頼らざるを得ないのです。

私たちの現状を理解するのは難しいでしょう。私たちが住んでいるのは肥沃な土地であり、森林も多く、豊かな鉱物資源に恵まれています。今日、ソ連についてどんなことが言われようとも、それがいかなる「悪の帝国」と呼ばれようとも、ソ連時代には、すべての人の暮らしは今よりずっと良かった

し、私たちは支援を必要としてはいませんでした。そして一番大事なことは、社会保障でも、明日という日への信頼感でもありません。あの頃、私たちは皆が同じ民衆という自覚があり、私たちのモットーは、「まず祖国のことを、それから自分のことを考えろ」でした。キリスト教の公理に端を発する共産主義の道徳は、人は他の人間にとって友人であり、同志であり、兄弟であると教えていました。今日では、それぞれの人が自分の思うままに生活しており、祖国のことでなく、まず第一に自分のことを考えています。そのために、良心に訴えることや、さまざまな慈善キャンペーンを行うことがこれほどにも難しいのです。楽観主義者であること、未来を信じることは困難です。

私たちは手をこまねいているのではなく、活動を続け、人々を支援しています。いつも支援を求められています。もしおできになるようでしたら、人に助けを乞うことがどんなに苦しいことか、想像してみてください。自分のためではない場合にも、それはやはり屈辱的なことです。自分の感情をコントロールし、ソ連時代の詩人であるマヤコフスキー（彼のことはご存知かと思いますが）が書いたように、「自分の歌がほとぼしるのを抑え」なければなりません。

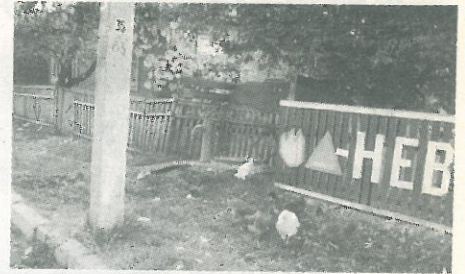
昨年、日本国外務省の「草の根無償支援プログラム」によって、私たちの基金は75,000ドルを提供されました。また、「チェルノブイリ救援・中部」からは63,000ドルの援助がありました。今年、「草の根プログラム」で、ジトーミル市立小児病院は41,000ドル、ジトーミル市立第2成人病院は21,000ドルの支援を受けました。カタログハウス社から州立小児病院への支援は129,000ドル、「救援・中部」の支援もすでにほぼ昨年同様の額になっています。これらすべての金額は、すでに使用されつつあります。医薬品・粉ミルク・必要な医療機器・奨学金支払いなどの形で…。

これは、私たちの仕事の一例にすぎません。「チェルノブイリの1グリヴナ」の第2次キャンペーンが続けられていることについては、繰り返さないことにしましょう。その最初のきっかけとなったのは、今年2月に届けられた、岡山の柴田さんのご寄附4,707ドル（50万円）でした。



〈ナロジチ地区の子どもたちの明るい笑顔〉

山頂をめざす道のりは、いつでも厳しいものです。富士山に登るにしても、それほどたやすいことはありません。私たちにとっての山頂とは何でしょうか？ それは、まっとうな暮らしができる未来です。そして私たちは、倒れながらも歩き続け、高みへと這い登っていきます。そしてまた、ますます多くの人が、自力で魚を釣るようになっていきます。釣竿も、その他のあらゆる道具も、皆さんが私たちにもいつも与えて下さっているのですからなおさらです。



〈火事と放射能に注意！をよそに
ついでにむニワトリたち〉

【10月ウクライナ訪問団ナロジチ訪問報告】

ずくを惜しまず

伊那市 小牧 崇

10月に伊那谷二人組(原、小牧)で、ウクライナを訪問しました。



仕事の合間に憩いのひととき…。

テーマは、今後の支援のあり方を探る旅。直前の運営委員会において(1)北野プロジェクトの今後 (2)民間医療保険組合加入…等々、いわば非常勤運営委員である二人にとって荷の重い課題が次々と出され、やや気重な旅立ちでしたが…結果的には、案ずるより産むが易かったかなと思います。

遠隔地に暮らすメンバーの意見をまとめ、8,000km離れたウクライナの支援をするという私達の活動に、電子メールという道具は欠かせません。事実、訪問にあたっての細かい打ち合わせは、伊那と名古屋の間でメールのやりとりで詰めましたし、8月合宿の結論の一つである「緊急支援的性格の粉ミルクについて、一般寄付金から補填はしない」について、事務局と現地との事前のメールで了解が得られるなど、その威力を発揮しています。

しかし最後は、直接顔を向き合って、じっくり話し合うことによってしか進まない。そんな感想を持ちました。これは手間のかかる話です。「ずくを惜しまない」(ずく=手間とか根気を意味する伊那の方言)ということでしょうか。

ナロジチ行きをはさんだ10日・13日の二日間、現地の諸団体(ホステージ基金、被災者3団体、市立小児病院、工科大)と意見交換を行いました。以下その一部を紹介します。

(1)北野プロジェクトについて…北野さんを中心に年1回現地を訪れ①交換部品の提供 ②病院等に送った医療機器のメンテナンス ③講義(人材育成)といった支援を行ってきました。しかし年を経るにつれ、現地ニーズとのズレが広がっているのではないかと懸念が出てきたのです。特にメンテナンスの専門家養成を目指す③については、システムの相違や病院にそのスタッフを置く

ための財政的ゆとりがないことから、疑問視する意見が現地から出ていました。今回直接話を伺うなかで、いくつか課題はあるものの、現地でも長い目で見ればその必要性は認めていることが分かりました。①、②については喜ばれています。③についても、もう少し突っ込んだ事前の打ち合わせを重ねることで、今後の展望も開けるのではないかと考えられます。

(2)保険組合加入問題…日本では当たり前の健康保険制度ですが、ウクライナにはありません。しかしジトミル州で、保険組合制度(民間)が誕生しているのです。この制度を利用することで、現地の人々の自立を促し、被災者により高度な治療が可能になるのではないかと私達は加入を求めたのですが、被災者3団体からはいずれも消極的な意見が出されていました。実際に話を聞くと、たしかに使いにくさなど問題はありそうです。でもそれは、各団体が保険組合に積極的に働きかけ、改善を迫ればよいことです。実際には各団体とも、会員の6~9割が既に加入しているとのこと。救援中部が今までの支援を止めるのではないかと、この危惧が消極的姿勢の根にありそうです。

事前に、事務局と現地ホステージ基金とのメールによる丁寧な打ち合わせがあって、意見交換もスムーズに進み、肩の荷が降りました。何よりも、新規事業のめどが立ったことを嬉しく思いました。ナロジチに軸足を移す支援は、ホステージ基金のキリチャンスキーさんを何度もナロジチへ出向させることとなります。彼の積極的同意なしに事は進まないと思っていた私にとって、彼の口から次々とナロジチ復興プランが繰り出されたことも嬉しく思いました。

最後に、ナロジチ消防署で聞いた「事故後10年間勤務していた40名弱の消防署員のうち、現在生き



ナロジチ消防署の消防士たち

残っているのは4名。多くは45~50歳で亡くなった」は、今回一番こたえた話でした。

ナロジチ復興再生プロジェクト始めます！

長野県南箕輪村 原 富男

ウクライナ滞在期間中の10月11日～12日、ナロジチ地区を訪問した。ナロジチ訪問は、新規支援事業を探るため、訪問先はナロジチ地区病院、保健所付属放射能測定室、消防署、地区行政、ボロトヌツァ村（集団農場、小学校、井戸ポンプ施設）。

【放射能測定】保健所付属放射能測定室は病院から歩いて5分程の所にある。訪問前には測定が不充分ではないかと思っていたが、実際には、地上・空中・食品の放射能（セシウム・ストロンチウム・カリウム等）を測定しており、測定結果は、州の医学関係者向け新聞や住民の読む新聞に掲載され、また住民が心配だと思われる食品を持ち込めば、測定してくれる。そして宅地や家庭菜園の測定も行われていて、結果は知らされているとのこと。現在ストロンチウム等の測れる複合測定器が遠くにしかないので、欲しいとのこと。

【ナロジチ地区の問題点】地区行政では非常事態課、議会議長、州汚染地区担当者などと面会しナロジチの現状について聞いた。ナロジチの人口は10,300人で、年間予算の80%が補助であり、自立には程遠い現状だ。現在困っていることは、集団農場のトラクターの故障、上水道用井戸ポンプの故障（3村）、水道水に含まれるサビ（他地区に比べ6倍も）の浄化。最近ドイツ、ポーランド資本がシトーミル南部で菜種を作付けし、軽油に代わるバイオ燃料を作ることが始まっている。菜種は放射能を吸着する作用もあるので、注目している。樹木の汚染除去について、日本の研究者と交流したいとのことだった。

【ボロトヌツァ村水事情】ボロトヌツァ村では、上水道用の井戸ポンプが故障している現場を見た。サビまみれの配管を見て、ナロジチの水事情の深刻さを改めて思った。修理代14万円が無いため、320人の村人が水道を使えない。

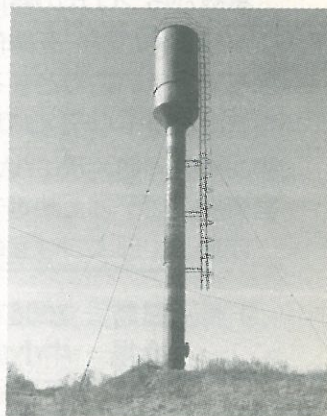
【集団農場】集団農場も見せてもらった。集団農場の耕作可能面積は1,200haだが、トラクターとコンバインが壊れ、その上燃料を買うことが出来ないで、耕作出来ている面積は600haだけ。村の産業は農業と林業しかないのに、この実態では…。

【小学校訪問】予定には無かったことだが、教師である小牧さんの要望で小学校を見学した。生徒37名は、急な訪問に驚いた様子だったが、好奇心一杯、もう日本では見られなくなった素朴な子ども達を見て、僕達は嬉しくなってしまった。給食とおやつは、別棟の食堂で食べ、授業は科目ごとに生徒が教室を移動する。

【菜種燃料の可能性…】行政で聞いた実験的な菜種の話に大いに興味を持った。資料によれば、国連が2002～06年まで汚染の除去を研究していた、放射能を多く吸着する菜種の種類を見つけたという。これが本当ならば、放射能の吸着と菜種から摂れるバイオ燃料（ジーゼル燃料他）の一石二鳥だ。特にボロトヌツァ村ではトラクターの燃料さえ買えず、何を作付けしても利益が上がらないという事情があり、菜種燃料は朗報である。

ボロトヌツァ村は小さな村である。僕は前から、具体的に顔の見える付き合いをしたいと思っていたので、一目でこの村が気に入った。出来ることならば集団農場のおっさん達と話をしたり、子ども達と遊んだりしながら、この村で出来ることを少しずつやれたらいい。日本の有機農業の農民や、農林業の研究をしている大学の農学部の人達と交流できれば、多彩な支援が出来るのではないかと楽しみにしている。

帰国早々運営委員会で、ボロトヌツァ村の井戸ポンプの支援が決定された。ポンプを手始めに、着実にナロジチ復興再生プロジェクトを進めたい。



<工事を待つ、水道タンク>

「1グリブナ」・キャンペーン ☆ 「一人ひとりの花キルト」・キャンペーン

「チェルノブイリ事故20年・チャリティバザー(2006年3月)」のお知らせ

来年春のチェルノブイリ事故20周年を前に、今年の暮れは、各種キャンペーンを展開中です。

★チェルノブイリ子ども達のために—「1グリブナ」・キャンペーン

これは、ホステージ基金が行っている、チェルノブイリ子ども達への支援募金で、ジトーミル州立小児病院の血液腫瘍センター機器整備に使われます。第1次キャンペーンでは、この施設の充実によって、首都キエフの病院まで患児達を運ぶことなく、ジトーミルで治療できるようになりました。第2次キャンペーンは、来年4月26日の、チェルノブイリ事故20年の日まで行われます。

これに呼応して、チェル救でも支援を展開、日本の家庭に眠っている日用品・文房具・化粧品・台所用品(全て新品)など、小型で軽量の品物の寄付を呼びかけます。これらを、ただ今企画・募集中の来年4月のスタディ・ツアーで持参し、現地でバザーを開き、1グリブナで販売して救援金にします。どうぞ、ご家庭に眠っている物品を、チェル救事務局までお送りください。詳細は同封のちらしをご覧ください。(※ 因みに1グリブナで買える物は、小麦粉500gほどです)



★「一人ひとりの花キルト」・キャンペーン

これまでチェル救は、放射能汚染地から移住した人々の暮らす移住者村の診療所や、事故処理作業員、子ども達の支援を行ってきました。その診療所やサナトリウムへ、被災者を励ますキルトを送ろうと呼びかけています。これは、チェル救が行ってきた「心の支援」の一環です。キルトのテーマは「花」。自分の好きな花をデザインしたピース(22cm四方)を作り、それをつなげて壁掛けやベッドカバーにします。本格キルトはもちろんです、アップリケでも、花の布模様を切って貼り付けたものでも結構です。

心を込めた花キルト作りに、ご協力をお願いします。現在、大垣市と豊橋市で2作品が完成間近となっています。ぜひ3枚目の製作に、ご参加下さい!

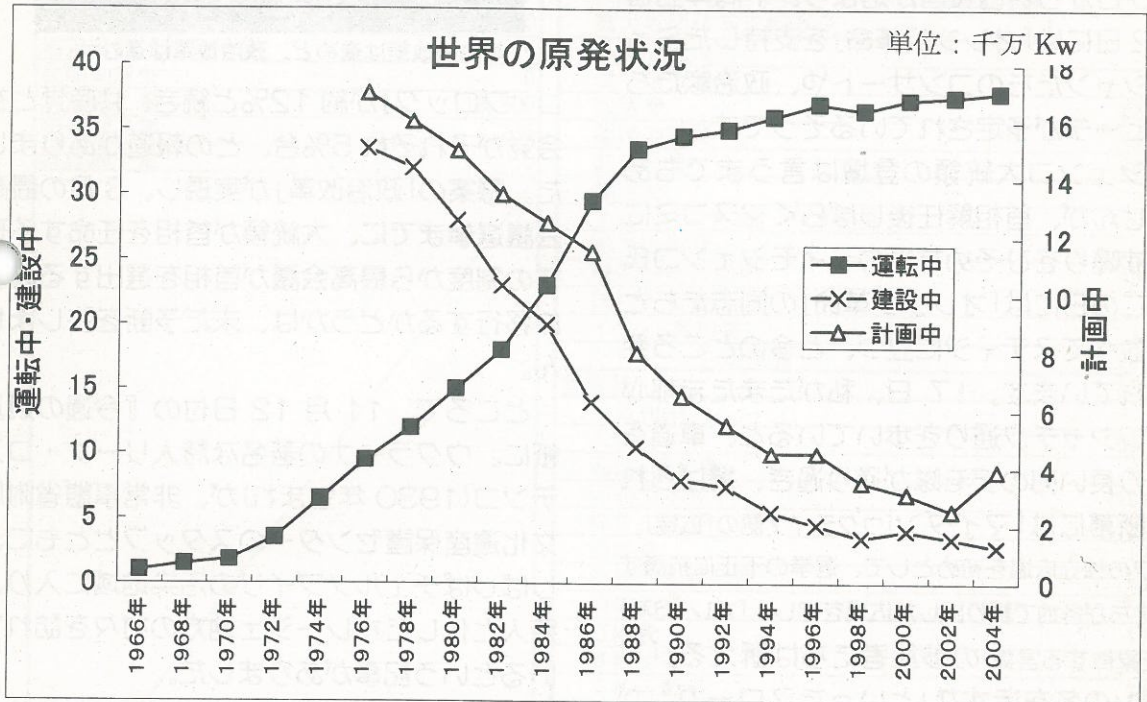
★2006年3月「チェルノブイリ事故20年・チャリティバザー」開催予告!

事故から20年の春に、チェル救の協力団体で正会員の「中部よつば会」とチェル救が共催して、チャリティバザーを開催します。事故からおよそ20年が経過し、「チェルノブイリ」が人々の記憶から消えていこうとする時、今一度この事故を思い起こし、事故が人事ではないことを確認し、被災者救援チャリティバザーを開催します。集まった収益金は、チェル救が現地の被災者に送ります。物品販売の他、チェルノブイリ・ミニ講演会、現地報告や、チェルノブイリ子ども達の絵画展、写真展、ビデオ上映等も行います。

また、中部よつば会の安全でおいしい食品も試食できます。お楽しみに。(山盛)

日時 2006年3月4日(土)11:00~16:00
会場 中小企業センター(名古屋駅前)1階 第一展示場
内容 不用品バザー(新品に限る)・ブース出店・喫茶・試食コーナー
ミニ講演会・絵画展・写真展・ビデオコーナーなど盛りだくさんです。

チェルノブイリ事故からもうじき 20 年。世界に大きな衝撃を与えたこの事故は、その後の世界と日本のエネルギーの未来にどのような影響を与えただろうか。北朝鮮やイランの核開発が話題になるこの頃、何が本当の問題なのか、核廃棄物と私たちの未来などを来年 4 月まで考える。



上の図は、世界の運転中、建設中、計画中の原発の発電能力の推移を示したものである。2004 年末現在、世界全体では 434 基の原発が稼動しており、約 3.8 億 Kw の発電能力がある(上図)。上の図で分かるように、原発の建設と計画は 1970 年代末から下り坂になっている。これは 1979 年のアメリカのスリーマイル島原発の重大事故の影響があると見られる。スリーマイル事故は、爆発こそしなかったものの、事後調査で厚さ 20cm の圧力容器に亀裂が走り、きわどい事故だった事が分かっている。しかし、世界の原発の未来に決定的影響を与えたのは、やはり 1986 年のチェルノブイリ事故である。この後、建設中、計画中とも

急に減少し、運転中の原発も増加しなくなったことが上の図でも明らかである。即ち、原発は終わりの始まりを迎えたのである。現在運転中の原発の 80%以上は運転暦 15 年以上で、今後急速に廃炉の時代を迎える。すでに、世界中で廃炉になった原発は、117 基 (3,600 万 Kw) に上る(主なものは、アメリカ 23 基・イギリス 22 基・ドイツ 19 基・ロシア 12 基・フランス 11 基)。今後原発からの撤退を決定又は検討中は、ベルギー・ドイツ・イタリア・オランダ・スウェーデン・スイスなどである。日本も今後新たな原発建設は困難で、政府は既存原発の延命処置を目指しているが、それは事故と背中合せである。(河田)

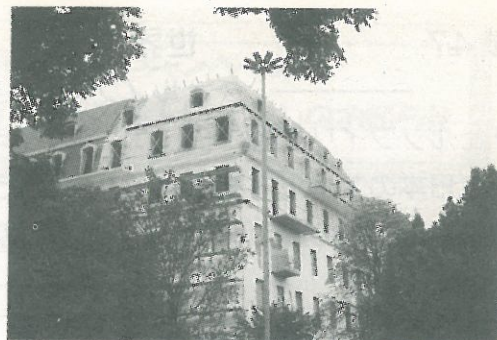
竹内さんのウクライナ便り

プラス 5℃前後の気温で、11 月後半としては暖かめのキエフでは、「オレンジ革命」開始 1 周年の日が近づいており、日本のマスコミも取材に来るようです。都心の独立広場では 20 日から舞台設営が始まり、1 周年当日の 22 日には「オレンジ革命」を支持したミュージシャンたちのコンサートや、政治家たちのスピーチが予定されているそうです。

ユシエンコ大統領の登壇は言うまでもありませんが、首相解任後しばらくマスコミに現れず鳴りをひそめた形のティモシエンコ氏も、この日には「オレンジ革命」の同志たちと肩を並べてステージに立つ、と今のところ発表されています。17 日、私がたまたま都心のクレシャチク通りを歩いていると、車道をかなり長い列のデモ隊が通り過ぎ、掲げられた横断幕には「マイダン[ウクライナ語の「広場」]。キエフの独立広場を初めとして、選挙の不正に抗議する人たちが各地で繰り出した広場を指し、「オレンジ革命」を象徴する言葉]の参加者たちは訴える「マイダンの名を汚すな」といったスローガンが書かれており、「オレンジ革命」でユシエンコ氏を支持した主に若い人々が現政府への不満を訴えるデモのようでした。同日の TV ニュースでは、支持政党についての世論調査の結果、ヤヌコーヴィチ氏率いる「地域党」が首位(17%強)を占め、ユシエンコ大統領の与党連合「我らのウクライナ」の支持率は 15%程度、ティモシエンコ氏の「ユーリヤ・ティモシエン



キエフ・アンドレイ坂の「恋人の像」竹内さんと小牧さん



建物の改築は進めど、政治改革は進むか…

コ・ブロック」が約 12%と続き、共産党と社会党がそれぞれ 5%台、との報道がありました。懸案の「政治改革」が実現し、3 月の最高会議選挙までに、大統領が首相を任命する現在の制度から最高会議が首相を選出する制に移行するかどうかは、未だ予断を許しません。

ところで、11 月 12 日付の『今週の鏡』紙に、ウクライナの著名な詩人リーナ・コステンコ(1930 年生まれ)が、非常事態省附属文化遺産保護センターのスタッフとともに、しばしばチェルノブイリの汚染地域に入り、無人と化したポレーシェ地方の村々を訪れているという記事がありました。

センターの調査団は、移住が行われた後の村で一軒一軒の農家に入り、手作りの生活用具や民芸品、聖画、古い写真などを収集し、風俗習慣を記録しているのだそうです。「チェルノブイリ惨事のイメージに、新しい色論を与えなければならぬと思います。『[新しい]石棺の建設費を出してくれ』と外国に要求するばかりであってはなりません。文化的・人文科学的・人間的なアプローチが、チェルノブイリの問題に対する全く別の認識を与えてくれます」というコステンコ氏の言葉は、京都大学の今中さんの、「物理学的・医学的影響以外に、チェルノブイリの社会的影響を考えなければ」という言葉を思い起こさせます。

記事に書かれている汚染地域での興味深いエピソードの数々を、ここで詳しくご紹介できないのが残念です。(11 月 18 日)

NPO法人チェルノブイリ救援・中部 2005年度上半期収支報告書

(2005・4・1～2005・9・30)

収入の部		支出の部	
項目	金額(円)	項目	金額(円)
救援寄付金	1,315,615	事業費	7,011,507
個人(184件)	727,750	医療機関支援事業費	3,820,250
団体(4件)	587,865	医療機器メンテナンス事業	1,620,250
運営費関連寄付金	218,000	医薬品提供事業	2,200,000
個人(29件)	208,000	保健事業費	1,200,000
団体(1件)	10,000	粉ミルク提供事業	1,200,000
外務省補助金	0	被災者団体等支援事業	0
地方公共団体交付金	0	外務省返還金	3,500
民間助成金	0	奨学金事業費	0
物品売上等	118,800	派遣費	523,920
預金利子等	235	業務委託費	449,989
現金過不足	0	駐在員費	330,178
		輸送費	0
		文通・クリスマスカード事業費	0
		海外監査費	0
		機関紙発行費用	456,670
		国内監査費	7,000
		イベント参加費	10,000
		キャンペーン活動費	210,000
		管理費	1,558,970
		役員報酬	0
		人件費	663,500
		通信・荷送費	83,745
		印刷製本費	191,883
		旅費交通費	161,350
		会議費	12,750
		消耗什器備品費	33,948
		消耗品費	51,756
		修繕費	17,952
		事務所費	270,231
		支払手数料	34,855
		為替差損・両替手数料	0
		諸謝金	4,000
		団体会費	33,000
		雑費	0
		使途不明金	0
当期収入合計	1,652,650	当期支出合計	8,570,477
前期繰越	11,750,293	当期収支差額	-6,917,827
収入総額	13,402,943	次期繰越収支差額	4,832,466
		支出総額	13,402,943

上記期間の収支報告書を監査した結果、異常なく正当に処理されていることを証明します。

2005年10月15日

監査人

南 和也 (南)

年度末現預金残高と次年度繰越収支差額の突き合わせ

年度末現預金残高 + 立替金 = 次年度繰越収支差額

480,9262 + 23,204 = 483,2466

立替金

カタログハウス立替金

23,204

監査報告

今年度上半期の監査が終了しました。皆様の貴重なご支援に支えられ、今年もなんとか無事に乗り切ることができそうです。医療機器、医薬品、ミルク代などは現地の自助努力を促進するという一方で、縮小方向で進めております。今後の新しいプロジェクトとして、ナロジチ地区の体内被曝を防ぐための広報活動など、様々な企画をしております。読者の皆様からも救援・中部のプロジェクトに関してご意見、ご質問などございましたらどうぞお寄せください。

事務局便り

10月からインターンをさせていただいている遠山と申します。名古屋 NGO センターの主催している NGO スタッフ研修のプログラムの一環として、4ヶ月間お世話になります。現在は主に事務局でのお手伝いをしています。活動当初の頃や現地でのお話など武勇伝の数々は大変興味深く、活動の歴史を感じています。

例外なく研修生として、ミルク・クリスマスキャンペーンを任せられました。今までのミルクキャンペーンにおいては、目標額に届かなかった場合は一般寄付金からプラスしていたとのことでしたが、今年から集まった募金のみということで、責任の重さを痛感しています。先輩方の築きを基に、なんとか新しいものをと試行錯誤の日々です。全ては自分次第という可能性に胸を躍らせつつ、一方では自分を試されているプレッシャーも感じずにはられません。この場をお借りして、みなさまどうかご協力お願いいたします！

事故を風化させない、ということが一番大切に思っています。チェルノブイリを直接知らない世代として、これからどう若い世代に伝えていくべきか、同じ若い立場だからこそできる視点で活動していきたいと思っています。興味関心の種を蒔いていける人になれるよう、今はひたすらいろんなものを吸収して視野を広げたいと思います。短い間ではありますが、みなさまどうぞよろしくお願いいたします。(遠山涼子)



【ちょっとお知らせ】

2月11日(土)のウクライナ講座は、ピタリーさんの講師で料理教室を予定しています。なんと！彼は、料理はお手のものという情報が入りましたよ。ウクライナの男性は、料理がお得意！（詳しくは、次号で）

編集後記

☆この所、天気予報で各地の気温が気になっている。竹内さん情報「現在キエフの
日中の気温は2~5℃」は、どのくらいの寒さか？どうも北海道の旭川ぐらいらしい。
来年2月からのウクライナ留学を目前にして、武者ぶるい?! (京)

☆夏に持ち帰った“ウォッカ”で、クランベリーの実酒を漬けた。12ヵ月で飲み
頃・・・(喜)。来年のクリスマスは、美しい色と甘い香りの刺激的なりキュールで
乾杯さ。(美)

☆夜は忙しい。お風呂上がりの化粧水と美容液の間(佐伯ちずによると3分あけるとよい)にデューク更家のトルソーウォーキング。そのあと腰割り体操。とどめは乳がんチェック。美容と健康の雑誌とテレビの見すぎかなあ。(佳)

〒456-0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14
印刷「エープリント」
TEL・FAX (052) 871-9473